第八講　内容真偽問題解法　30分

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

言葉使いというものは単なる口癖であるに止まらず我々の考え方に大きな影響を与える場合が少なくない。政府が弱腰だ、[a]オウボウだ、けしからん、などと言っているうちに、政府が人格化されてきて何か巨大な人間のように感じられてくる。時間がある、ない、時間の配分、などと言い馴れているうちにいつしか時間という「もの」があるような気になってしまう。それらと同様に、近頃流行になった、コンピュータが考える、計算する、記憶する、といった言い廻し（まわ）がコンピュータの人格化に誘う危険がある。【A】その一方で今度は脳についての同様な言い廻しが脳の人格化を招きつつある。そして本当の人間そのものの影が薄くなってしまうのではないかという[b]キグすらでてきている。そこで一旦踏みとどまってコンピュータと脳についての言葉使いを反省してみることにしよう。

コンピュータが例えば複雑な計算をする、それも人間の到底及ばぬ速さと正確さでやることは珍しくもない事実である。【B】それに疑いをかけ

ようというのではない。しかし私が問題だと思うのは、コンピュータが計算するという時の「計算する」という言葉の意味なのである。

　例えば、コンピュータに一〇〇桁をこえる二つの数の掛算をやらせると立ち所に正確な答を打ち出すだろう。簡単に言えば、計算問題をインプットすればその正しい答をアウトプットするのである。そしてこのように、計算問題を与えると正しく解答する、ということをコンピュータは「計算する」と言っているのである。【C】コンピュータが打ち出す答は生身の人間が出す正答と何の区別もない。手すきの紙と機械すきの紙の間には[X]歴然とした違いがある。本当の手打ちそばと工場製のそばの間には明らかに味の違いがあるだろう。【D】しかし、計算問題で人間が計算した答とコンピュータが打ち出した答との間には全く何の違いもないのだから、人間が計算する、と言うのなら当然「コンピュータが計算する」といっていいわけである。

　しかし、このように[1]コンピュータについては容易に「計算する」と言われるのに、算盤（そろばん）についてはそう言いにくいのはなぜだろうか。それは算盤はコンピュータ程には「自働的」でないことによると思われる。進歩したコンピュータは計算の問題を光学的、または音響的に「読み取る」だろうが算盤は人間が指で珠を動かさねばならない。また計算結果もコンピュー

タは自動的にプリントするのに対して算盤は人間が「読み取る」必要がある。こうして、コンピュータがいわば全自動計算機械であるのに対して算盤は高々の所半自動装置なのである。そのため、コンピュータは人間と肩を並べて「計算する」といえるのに、算盤は単に人間の計算の補助道具であってそれ自体が独立に「計算する」などとは到底いえない、こうわれわれは感じているのである。だから、算盤の入力部分をできるだけ自働化し、出力部分も自働的表示にした卓上計算機に対しては、われわれは「計算する」ということに[c]テイコウを感じないのである。

　このようにしてコンピュータが「計算する」という言い方を許す方式を「機能的同類化」と呼んでおこう。それは「計算する」という機能からみて、またその機能に限ってみるならば、コンピュータを人間と同類にあつかってかまわない、ということだからである。

　この[2]機能的同類化の核心は、（　　　　　　　　　　）、ということである。問題提示――→解答表示という作業遂行ということだけで同類化が許されるのであって、それ以外のいかなる同類性も意味しないのである。人間が鉛筆をなめなめ頭をひねって足し算や掛け算をするときの「経験」に類したことはコンピュータには一切[d]カイムであることはいうまでもない。コンピュータには「経験」などがあるはずもない。あるのはただおびただしい

LSIを含んでいる電気回路の作動だけである。このことに気がつかず、あるいは忘却して、コンピュータが人間の経験に何程か類似した経験をもっているという意味で「コンピュータが計算する」と言うとすればそれは明白な誤りである。この誤りを意識的に犯す人はいないだろう。しかし、コンピュータが「計算する」「記憶する」「判断する」といったことを無頓着に口にのぼせ、やがて習慣的に口がすべるようになると、無意識のうちにこの誤りに誘い込まれる危険がなきにしもあらずなのである。この危険率は次に述べる脳についての言い廻しが加わることで一層増大する。

　例えば私が何か計算をしているとき、私の脳は忙しく動いていることは疑いない。この脳の動きが何かの原因で止ったなら私の計算も停止するだろう。アルコールその他の薬物で脳の動きが[e]ボウガイされると私の計算はうまくいかないだろう。この脳の動きが具体的にはどんな動きなのかは現在なお正確に言えないにせよ、人間の知的活動には脳の動きが伴い、脳の動きが不可欠であることは現代の常識であろう。そして[3]この状況から一つの誤解が生(うま)れてくる。私が計算をするとき、計算するのは如何にも私であるがそれは表面のことであって実は私の脳が計算するのだ、という誤解である。この誤解が育ってゆくと、やがて、右脳が言語を理解する、左脳が空間認識をする、側頭葉が記憶する、といったたわごとを口走るまでにな

りかねない。それを防ぐために事の始めに戻って事態を観察してみよう。

（中略）

日常的意味で私が「計算する」時に何が起っているか生理学的に観るならば、その中核となるのは私の脳に生じている過程であろうことには間違いない。この脳で生じている過程の精細は現在もなお不明であるだろうがそれを「脳過程（計算）」と表わすことにしておこう。同様に、「脳過程（判断）」とか「脳過程（記憶）」とかが考えられることはいうまでもない。

　すると、「私が計算する」という命題が表現している事態を生理学的に表現するならば「（私の）脳に脳過程（計算）が生じている」ということになる。言い換えると、日常的には「私が計算する」ということはとりもなおさず即ち「脳に脳過程（計算）が生じている」ということなのである。そしてこのことは生理学的研究が発見したことであるのは、「物が燃える」ということは即ち「それが酸素と化合する」ということだと化学の研究が発見したのと同様である。したがって、燃焼とは実は酸化に他ならないといわれるのと同様に、私が計算するとは実は脳過程（計算）が起きることに他ならないと考えられるのである。つまり、学問的研究によって得られた新知識に基づいた新しい表現で古い常識的表現を置き換えたのだ、と感じられるのである。だがたとえそうだとしても古い常識的表現を御用済み

にして使い捨てにする必要はあるまい。むしろこの常識的表現と科学的表現を同一事態の二通りの異形表現だとみるべきではなかろうか。それぞれの表現にはそれに適切な状況があってその状況では他方の表現は場違いになるのである。例えば幼稚園やスーパーで科学的表現を使えば物笑いの種になる。「昨晩お向いのお宅が酸化しましてね」とか「ちゃんと脳過程（計算）を起こすんですよ」とか。

　このような日常的表現と科学的表現との関係を[4][一般に「重ね描き（かさねえがき）」の関係と呼ぶことにする。]例えば私が計算をするという一つの事態を一方は日常的な観察態度で日常的言葉を使って表現し、今一方は科学的観察態度で科学的用語を使って表現する。そしてこの二つの表現は共に同一の事態の描写として時間空間的に重なるものだからである。「奥歯が痛い」という日常表現には、奥歯の細菌による化膿（かのう）、そこからの痛覚神経のパルス伝達、そこから二・三のシナプス（神経接合部）を経ての大脳皮質神経細胞の興奮、といった科学描写が、奥歯の場所を始めとして空間的に、また痛みの始まりや強弱の時刻などの時間に重ねてなされる。何かを判断する、何かを憶い出す、といった日常描写にも同様に時間空間的に重ねて脳の中の生理学的描写がなされる。

　しかし注意すべきは、この「重ね描き」の関係にあるのは日常描写と科

学描写という二つの命題であって、その命題の中の個々の単語ではないということである。ましてや、重ね描き関係にある二つの命題の一方の主語に他方の命題の述語を付けるなどということは決して許されることではない。もしそんなことをすれば全く意味不明なキメラ命題になってしまう（キメラとは二つの動物を接合した化物的生物である）。

ところが、「脳が計算する」という命題はまさにそういったキメラ命題に他ならない。

それは、「私が計算する」という日常表現の述語を、それに重ね描かれる「脳に脳過程（計算）が起きる」という科学命題の主語に付けた命題だからである。

（大森荘蔵『思考と論理』より）

※問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問一　傍線部a～eを漢字表記に改めた場合、それと同じ漢字を傍線部で用いるものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

a　「オウボウ」
① オウチャクな態度をとる。
② 雪で車が立ちオウジョウする。
③ 好奇心がオウセイだ。
④ 悪口にオウシュウする。

b　「キグ」
① キチに富んだ会話を交わす。
② キシ回生のチャンスをうかがう。
③ キトク状態に陥ってしまう。
④ 争いごとをキヒする。

c　「テイコウ」
① 激しいコウボウ戦が続く。
② コウバイのゆるやかな坂道を歩く。
③ 武力コウソウに巻き込まれる。
④ 身柄をコウソクされる。

d 「カイム」

① 取引をバイカイして利益を得る。
② 計画をすべてテッカイする。
③ ケイカイなリズムで踊る。
④ カイキン賞を目指してがんばる。

e 「ボウガイ」

① 雑音が気にサワる。
② 通行をサマタげる。
③ 行く手がハバまれる。
④ 差しツカえのない返事をする。

問二 二重傍線部X・Yについて、その意味として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

X「歴然とした」

① 筋道のはっきり通った　② 証明する必要のない

③ はっきりと明白な　④ 並べてみるとわかる

Y「とりもなおさず」

① それがそのまま　② とりあえずは

③ 考えるまでもなく　④ それには及ばず

問三 次の一文の入る箇所として最も適切なものを、後の中から一つ選べ。

もちろんこの言い方は当然な言い方である。

① 【A】　② 【B】　③ 【C】　④ 【D】

問四　傍線部1「コンピュータについては容易に『計算する』と言われる」とあるが、なぜだと筆者は考えているのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① コンピュータは人間にとって身近な存在で、特に計算能力に関してはその速さと正確さが人間の能力をはるかに超えているから。

② 生身の人間が計算して出した結果とコンピュータが出した結果がまったく同じで、コンピュータは他の機械とは別格といえるから。

③ 人間が計算する際に用いる道具として、扱う人間自身の能力に左右される算盤と異なり、コンピュータは完全に自立しているから。

④ コンピュータは人間の補助がなくても自動的に計算することができ、その機能に限って人間と同類にあつかうことができるから。

問五　傍線部２の空欄に補う言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　同類化は「計算する」という機能に限っていえることであって他の機能ではいえない
②　同類化はただ機能の観点だけからであって機能以外の点での同類化を一切拒否する
③　同類化はコンピュータだけに当てはまることであって他の機械はこれを拒絶する
④　同類化は問題提示をして解決を示すことが条件であって解決以外のことは許されない

問六　傍線部３「この状況から一つの誤解が生れてくる」とあるが、ここでの「誤解」とはどのように考えることなのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

① 人間の脳の動きの詳細は正確にわからないのに、「計算する」という知的活動には脳が不可欠だと考えること。

② 「計算する」のは人間の身体全体で行われることなのに、脳の表面で行っているにすぎないと考えること。

③ 人間が「計算する」場合、脳には脳過程が生じているにすぎないのに、脳自身が計算しているのだと考えること。

④ 脳の機能は万能ではないのに、「計算する」ことを始め人間のすべての知的活動を脳が司ると考えること。

問七　傍線部4「一般に『重ね描き』の関係と呼ぶことにする」とあるが、「重ね描き」に関する説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　同一事態には常識的表現と科学的表現があり時間空間的に重なるが、科学的表現は古い常識的表現を新知識によって置き換えたもので、正確な表現だといえる。

②　学問的研究によって何かが発見されるたびに、常識的表現のうえに新しい知見による科学的表現が上書きされ、時間空間的な層が重なり厚くなっていく。

③　日常描写と科学描写は同一の事態を重層的に捉えて表現するためのもので、観察態度として日常的であることと科学的であることが同時に求められている。

④　一つの事態の描写として日常的言葉と科学的用語をそれぞれ用いた二通りの表現があり、時間空間的に重なるが、状況に応じた使い分けがなされている。

問八　本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選べ。

①　人間の脳の代わりになる能力をもつコンピュータは、機能が多角化するにしたがい人格をもつと誤解されるようになった。

②　コンピュータや脳に関するキメラ命題のような言いまわしは、それらを人格化して捉える誤りに陥らせるおそれがある。

③　不適切な言葉使いは考え方に影響を与え誤解を招くことがあるので、科学的用語は意味を誤らないよう正確に用いるべきだ。

④　言葉使いの乱れとともに、日常描写と科学描写という二つの命題が正しく捉えられず、物事の真実を見極められなくなった。

問一

a	d
b	e
c	

問二

X
Y

問三

問四

問五

問六

問七

問八

巻末付録

読解法一覧

読解法1　文の構造

文を読むときは「主部と述部」「修飾部と被修飾部」「接続部と文」という文の構造に気をつけよう。

《分析記号》
〈主部〉（=とんがりカッコ）
［修飾部］（=四角カッコ）
接続部　／（=スラッシュ）　文

読解法2　指示語・接続表現

文を読むときは「指示語」と「接続表現」に気をつけよう。「指示語」があれば「指示内容」を捉え、「接続表現」があれば「前後のつながり」に注意する。また、本書では「論理的なつながり」を強調するため、「接続詞」「接続語」ではなく「接続表現」という表記で統一する。

《分析記号》
「指示語」　=　○で囲む
「接続表現」　=　○で囲む

「指示語」のカテゴリー

①「指示語」

前の名詞や説明を指す。

「これ」「それ」「あれ」指示語（指示代名詞）
「この」「その」「あの」指示語（指示連体詞）

②「一般化の指示語（まとめの指示語）」

前の具体例や詳しい説明をまとめる働きがある。指示内容は前に書かれている説明を幅広く捉える必要がある。

「このような」「そのような」「こういう」「そういう」

「接続表現」のカテゴリー

①「解説」

前の語や文や段落を詳しく説明したり、要約的にまとめたりする。

「つまり」「つまるところ」「すなわち」
「要するに」「畢竟」「結局」
↓要約的な言い換え
「言い換えれば」「換言すると」
↓言い換え
「言わば」
↓改まった表現（比喩表現・個人言語）への言い換え

②「例示」

前の内容の具体例を引いたり、一部を強調したりする。

「例えば」「言ってみれば」
↓読者の理解のための具体例をひく
「とりわけ」「なかんずく」
↓全体の中から一部を取り出して強調する

③「理由」

前の文に対する理由を説明する。

「なぜなら」「というのは（も）」
↓評論文に多い
「けだし」「だって」
↓小説文・随筆文に多い

④**「帰結」**
前の文からの結果・結論を示す。（順接が多い）

「だから」「したがって」「それゆえ」
「ゆえに」「よって」「それで」
「そこで」「すると」「そして」
（因果関係がない場合もある）

⑤**「転換」**
前の主張や主題を転換する。

「しかし」「だが」「ところが」「とはいえ」「さりとて」
「それでも」「それなのに」「それにしても」「けれども」
「けれど」
↓「主張」の方向転換（逆接）

「さて」「ところで」「閑話休題」
↓「主題・話題」の転換

⑥「付加」

前の内容に別の内容を付け加える。

「さらに」「しかも」「そのうえ」「加えて」
「また」「および」「かつ」
「だけでなく」「のみならず」
→単純な付け加え

「一方、他方」「もう一方で」「他方で」
→対照的な内容を付け加える

⑦「補足」

反対の内容を補足する。

「ただし」「もっとも」

⑧「選択」

前の内容と後の内容のいずれか一方を選択する（両方の場合もある）。

> 「または」「あるいは」「もしくは」「ないし（は）」「それとも」

読解法3　文の関係

文を読むときは「同値（イコール）」「対立」「因果」「包摂（抽象具体）」という関係に注意する。「文の構造」「指示語」「接続表現」といった形式、および「言葉の意味」といった内容の両面から「文の関係」を捉える。

> **《分析記号》**
> **①「同値関係」**　A ＝ B
> **②「対立関係」**　A ↔ B
> **③「因果関係」**　A → B
> **④「包摂関係」**　A － a’

読解法４　レトリック（説得話法・修辞法）

筆者は自分の主張を理解してもらうだけでなく、納得してもらえるように様々な方法を用いて工夫をしている。その工夫が「レトリック（説得話法）」である。文を読むときには「レトリック」に気をつけよう。

①「問題提起」

読者に疑問を投げかけて意識を誘導し、答えとして自説を述べる。「疑問文」があったら、そのあとに「答え」が来ることを予想しながら読もう。

《分析記号》　波線をひく

「疑問文」→「◎答え（自説・持論）」

②「具体例」「体験談」

読者がイメージしやすいような例をあげる。また、実感を込めるために体験談をあげる。これらは筆者の主張を伝えるための手段なので、（丸カッコ）で括りながら常に「筆者の主張」を意識して読もう。

《分析記号》（丸カッコ）で括る

「◎主張」→（△具体例、体験談）→「◎まとめ」

抽象 → 具体 → 抽象

③「引用」

筆者が別の文章の筆者と対話しながら文章を展開することがある。二人で議論を進めることにより、論を深めるためである。引用は筆者の主張に対して「同意見」「反対意見」「根拠」「具体例」となるものがある。引用も（丸カッコ）で括りながら読んでいこう。

《分析記号》 引用（丸カッコ）で括る
引用（△引用）→「◎筆者の説明・解釈」

④「比喩」

内容のイメージを喚起しやすくするために別のものに喩える。

《分析記号》 □ で囲む
「直喩」＝「ような」「みたいな」をつけて喩える
「隠喩」＝「ような」「みたいな」をつけないで喩える
「擬人法」＝人でないものを人に喩える
「類比」＝同じグループ内の別のものに喩える

⑤「譲歩」

一般論や反論に一旦は理解を示しながらも、方向転換をして自説・持論を展開する。

《分析記号》 ○ で囲む
「確かに」「もちろん」「なるほど」「むろん」→△一般論・反論
「しかし」「だが」「けれど」→◎自説・持論

読解法5 論理フレームワーク

筆者は自分の伝えたい内容を定義・整理・分類することで、内容を正確に相手に伝えようとする。あらゆる筆者に共通する整理の仕方が「フレームワーク」である。内容を正確に掴むためにも「論理フレームワーク」に注意しよう。

《分析記号》 ○ で囲む

①「否定」のフレームワーク

Ａではなく、（ではない。）Ｂである
Ａより（ではなく）むしろＢ
Ａのようで実はＢ

※ＡとＢが反対の内容になる場合が多い。
※Ｂに筆者の主張が来ることが多い。

②「条件法」のフレームワーク

ＡならばＢ（ＡはＢである）
Ａの条件（前提、本質、基本）はＢである
Ａは常に（必ず、絶対）Ｂ
すべてのＡはＢである（全称文）
ＡのためにはＢでなければならない
（ＡのためにはＢである必要がある）
ＢでないならばＡでない
Ｂ以外にはＡはない
Ｂのときのみ（だけ、に限り）Ａ

Bしてはじめて（してこそ）A

※主張（命題）を表す。
※Aは十分条件、Bは必要条件を表す。
※「AならばB」の否定は「Aは必ずしもBとは限らない」である。
「AであってBでない」ような「反例」が挙げられる。

③「連言」のフレームワーク

AかつB
Aさらに、そのうえ、加えて、B
Aだけでなく、（だけではない。）Bも
Aのみならず、Bも
Aと（や）B
Aつつ、ながら、同時に、ともに、B

※Aという主張とBという主張が同時になされている。
※「AかつB」の否定は「Aでない、またはBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

④「選言」のフレームワーク

AまたはB
AあるいはB
Aもしくは、B
Aないし（は）B
Aか（や）B

※Aという主張かBという主張のうちどちらか一方（または両方）がなされている。
※「AまたはB」の否定は「Aでない、かつBでない」となる。（ド・モルガンの法則）

⑤「差異（対比）」のフレームワーク

AはXであるのに対し、BはYである
AはXであるのとは異なり（違って、別に、逆に）、
BはYである

※AとBの相違点を説明する。
※XとYは反対の内容になる場合が多い。

⑥「変化」のフレームワーク

AからBへと変化する AだったものがAでなくなる

※AとBは反対の内容になる場合が多い。

⑦「類似（類比）」のフレームワーク

AはXである。Bも（また）Xである AとBはともにXである Aと同様にBも（また）Xである AとBはXという点で同じである

※AとBの共通点を説明する。

⑧「逆説」のフレームワーク

Aすると、かえってB
Aと同時にB

※AとBは反対の内容になる。
※一見矛盾しているように見えるが真である。

⑨「因果」のフレームワーク

AだからB
AなのでB
AによってB
AのためB

※AとBに因果関係がある。

読解法6　論証

筆者は自説を主張するが、その主張は読者にとって飛躍があったり、常識に反する内容であったりする。そこで、筆者は読者に納得してもらうために「論証（証明）」を行う。その「論証」を読むために「論証のフレームワーク」に注意しよう。

①単純な論証

A（○根拠）→B（◎結論）

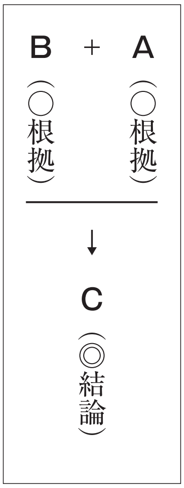
※根拠Aから結論Bが導かれている。

②論証の連鎖

A（△根拠）→B（○根拠）→C（◎結論）

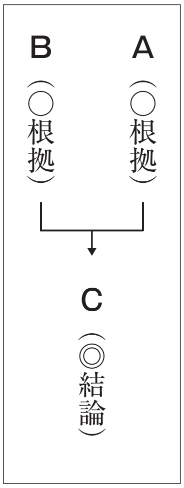
※主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

③結合論証



※主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。
※AかBかどちらか一方がもしないならば、この論証は成立しなくなる。

④合流論証



※根拠Aだけでなく根拠Bもあり、結論Cが導かれる。
※AとBはそれぞれ単独でも根拠になる。

読解法7　心情

小説文や随筆文では登場人物や作者の「心情」が問われる。「心情」を捉える際にはその心情が発生する「原因」まで捉える必要がある。そこで、「心情」を捉えるための「因果関係」を「心情」のフレームワークとして覚えよう。

①単純な心情

原因	→	心情	→	結果
（事態、事情）				（行動、反応、発言）

※「心情」部分が書いてない場合は「原因」と「結果」から推測する。

②心情の変化

心情A →（変化）→ **心情B**

↑ 変化の原因

※心情Aから心情Bへの変化を捉える。
※心情は反対のものになる。
※「心情A」「心情B」「変化の原因」の三点を捉える。

③結合原因の心情

原因A（外的）
＋
原因B（内的）
→ **心情** → **結果**

※「原因A」と「原因B」が組み合わさって「心情」が発生する。
※「原因B」は特殊事情であることが多く、「セリフ」「心中文」「過去のシーン」によって明らかになることが多い。

④心情の交錯

原因A → 心情A
＋
原因B → 心情B
→ 結果

※「心情A」と「心情B」が同時に存在する。

※「心情A」と「心情B」のそれぞれに「原因」がある。

※「心情A」と「心情B」は相反する心情である場合が多い。

傍線部内容説明問題解法「どういうことか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・指示語
・比喩表現
・個人言語

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

①「文構造」の分析について

★文法的構造

- 主語（主部）―述語（述部）
- 修飾語（修飾部）―被修飾語（被修飾部）や目的語（目的格）や補語（補格）など
- 接続助詞や連用中止法
- 倒置や省略

★論理的構造

- 否定　・差異（変化）
- 連言　・類似（アナロジー）
- 選言　・逆説
- 条件法　・因果

設問を解く際には、まずは傍線部（または傍線部を含む一文）の統語論的「構造」を分析することからスタートする。この構造を正確に分析して、なるべく元の構造を生かして、解答を構成するためである。ただし、日本語の慣習的統語規則を鑑みて、受動態から能動態に変換するなど元の構文を変形する場合もある。

②「ポイント」になる語句について

★ 指示語（代名詞）

㊗指 これ、この、このような、このように、それ、その、そのような、そのように　など

代 前者、後者、両者、右の、彼　など

★ 比喩表現　＝　直喩、暗喩、メタファー、レトリック　など

★ 個人言語　＝　筆者が一般的な意味とは異なる特殊な意味で使っている言葉、学術（専門）用語

③「解答の根拠」となる部分との対応について

★ 同値関係

★ 対立関係

★ 因果関係

★ 包摂関係（抽象と具体の関係）

以上の関係がある部分と対応させる。
このような関係で対応した部分が、記述解答を書く際の「解答の根拠」となる。

傍線部理由説明問題解法「なぜか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・Ａ→×
（飛躍している部分）

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

Ⅰ 「A→x」の発見

論証が必要な命題（文）には「A→x」という飛躍した部分がある。まずは、どこに飛躍があるかを見つけよう。

① 主語（主部）→述語（述部）に飛躍がある場合。
② 修飾部（接続部）→被修飾部（被接続部）に飛躍がある場合。

※文構造（係り受け）を分析する中で、構造的につながっているが、意味的につながっていない部分を探す。
※「x」は、「なぜ『～』か」というように設問が指定している場合もある。

Ⅱ 論証部の発見

飛躍を埋める部分が論証部となる。「A→x」のAの説明を求めよう。

Ⅲ 「論証」のフレームワーク

① 「単純な論証」 A → B

根拠Aから結論Bが導かれている。

〈例文〉 A子ちゃんは美人だ。　　**根拠 A**

したがって、　↓ **導出**

私はA子ちゃんが好きである。　　**結論 B**

※実はこの導出に必要な前提として、「私は美人が好きだ。」というものがある。
これは「隠れた前提」として筆者の論証が成り立つように補ってやる必要がある。
筆者の論証が成り立つように隠れた前提を補うというルールを「**寛大の原則**」という。

②「論証の連鎖」　A ↓ B ↓ C

主張Aが根拠となって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠となって主張Cが導かれる。

〈例文〉

A子ちゃんは目鼻立ちがはっきりしている。　**根拠A**

したがって、　← **導出**

A子ちゃんは美人だ。　**根拠B**

したがって、　← **導出**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※この形が「論証」の中では一番多い。「論証」の最後に来る文が「主張提示文」になる。
その前の文は「根拠」となる。

③「結合論証」

B ＋ A
―――――
↓
C

主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。

〈例文〉

A子ちゃんは美人だ。　**主張A**

＋ **結合**

私は美人が好きだ。　**主張B**

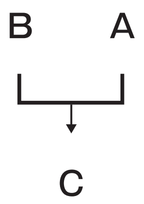
＝ **根拠**

したがって、 ← **導出**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※先に説明した「隠れた前提」がある場合、この結合論証となる。
この形も「理由説明問題」ではよく出題される。

④「合流論証」



根拠Aだけでなく根拠Bもあり、結論Cが導かれる。

〈例文〉

A子ちゃんは美人だ。　**根拠A**

また、

A子ちゃんは性格もよい。　**根拠B**

したがって、　**導出**

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※この場合はどちらか片方だけでも「根拠」になる。
設問の場合には「理由を二つ説明せよ」となることが多い。

Ⅳ　論証を捉えるヒント

A　帰結の接続表現

「だから」「したがって」「よって」
「それゆえ」「ゆえに」
「それで」（「そこで」）

B　理由の接続表現

「なぜなら」「というのは（も）」
「けだし」「だって」

C　助詞など

「〜から」「〜ので」「〜ため」「〜より」「〜のだ」「〜のである」　→　**〜が原因・理由を表す**

D　直接表現、比喩表現など

「理由」「原因」「結果」「帰結」「結論」
「～から生じる」「～に根ざしている」
「根源」「背景」など

傍線部心情把握問題解法「心情」の解答プロセス

①　←

「文構造」を分析する。

・文法的構造

・論理的構造

②　←

「ポイント」を把握する。

・原因 → 客観的事態や主観的事情

・心情 → ⊕心情や⊖心情

・結果 → 行動や反応や発言

③　←

「解答の根拠」となる文と対応させる。

Ⅰ　単純な心情

原因　→　心情　→　結果

※心情把握問題の基本形。
※この場合は心情が書いてないため、原因と結果から挟み撃ちして心情を把握する問題になっていることが多い。

Ⅱ　心情の変化

原因A　→　心情A　→　結果A　→　原因B　→　心情B　→　結果B

※心情把握問題で一番有名な問題。
※心情Aから心情Bへの変化、そして変化の原因を三点セットで捉える必要がある。

Ⅲ　結合原因の心情

原因A **＋** **原因B** ――― **↓** **心情** **↓** **結果**

※原因Aだけ捉えて答えようとすると間違いになる選択肢が多い。

※原因Bは**「リード文」「会話文」「心中文」「回想シーン」**などにある場合が多い。

Ⅳ　心情の交錯

原因A → 心情A	
＋	→ 結果
原因B → 心情B	

※一番分析が難しい問題。
※心情Aの原因が原因Bになっていたりと、原因の部分を入れ替えての誤答選択肢が多い。

空所補充問題解法　「空所」の解答プロセス

①　空所のある文に線を引く。

←

②　「文構造」を分析する。
・　文法的構造
・　論理的構造

←

③　「解答の根拠」となる文と対応させる。
・　似た構造の文に注意

脱文補充問題解法「脱文補充」の解答プロセス

①「脱文」を分析する。
・文法的構造（特に指示語）
・論理的構造（特に接続表現）

←

②「前の文」とつなげてみる。
・指示内容
・接続

←

③「後の文」とのつながりを確認する。

文整序問題解法　「文整序」の解答プロセス

①
「整序する文」を分析する。
・文法的構造（特に指示語）
・論理的構造（特に接続表現）

↓

②
「繋ぎやすい文」からつなげてみる。
・指示内容
・接続

↓

③
「すべての文」をつないで読んでみる。

内容真偽問題解法　「内容真偽」の解答プロセス

①「それまでの問題」を解く。

↓

②「選択肢」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

③「本文」と対応させる。

第八講　内容真偽問題解法　解答

問一

a	b	c	d	e
①	③	③	④	②

問二

X	Y
③	①

問三　③

問四　④

問五　②

問六
③

問七
④

問八
②